OCUAC NEWS

市大山岳会ニュース

2000.3.20 発行

no.29

Aconcagua 急ぎすぎた登頂により敗退

佐々木惣四郎

＜行　　先＞ 南米アルゼンチン　アコンカグア峰（6960m）ノーマルルート

＜メンバー＞ 佐々木惣四郎、福山昇二、小松稔、小林深、若林健治

＜期　　間＞ 1999/12/19−2000/1/12

先発：12/19、後発：12/22

＜はじめに＞ 今回の企画は、1999年5月より温めてきたものであり、9月よりキップの手配を進めたが、非常に厳しく、11月になってやっと実現した旅であった。

結果として、後発 ブエノス入りは12/25日で、先発と5日間の開きがついた。

＜経　　過＞

1) 先発隊への後発隊の合流

12/19日　先発の福山、小松、小林の3名が出た後、現役の若林、佐々木の2人が12/22日出発。しかし、ブエノスアイレスよりメンドーサにはいったのは12/25日20：00であった。サンフランシスコにて2日間、飛行機待ちがあったためである。

12/26日　登山許可書をとり、買い物する暇は全くなくインカ（2700m）にはいり、その日のうちにコフルエンシア（3300m）にはいった。

12/27日　6：00過ぎより行動してBC（4300m）にはいったのは15：00過ぎであった。先発隊と4日間の開きがあった。BCへのルートは広く長く、途中でルートを誤り、時間をくってしまった。

BCのテント場には日本の涸沢に似て多くのテントがあり、活況を呈していた。

2) BCよりC1、C2へ

BC到着後、すぐにC1入り及びC2荷上げの準備をして（ポーター使用）、翌28日福山と共にC1（5200m）に入り、小松、小林と一緒になれた。

C1（ニード．コンドレス）へのルートは 踏み跡のある雪のない道で富士山の登りに似ている。

12/29日4人でC2に向かい、C2設営（ベルリン：5800m）して、3人がABCに揃った。福山はBCに下る。C2へのルートもC1までのルートとよく似ており、景色が最も広がった。雪はところどころにある程度。

30日小松、小林が登頂を狙い、佐々木はインデペンデント（6500m）あたりまで順化に行くことにした。

3) 登頂に向けて

天気は良く、小松・小林がアタックに向かうことになり出発。佐々木は途中まで行く予定であったが、これといった頭痛もないので、行ける所まで行くことにしてインデペンデントまで登った。インデペンデントから雪があらわれアイゼンの着用となる。

すでに小松・小林パーテイがあとになっていた。風は-10℃ぐらいで冷たく、この頃より目がおかしいことに気がついた。まわりがかすんできたのである。

輪郭がぼやけてきて、先を行く人がよく見えなくなってきた。

従い、早く登頂しようとしたが、頂上直下（6900m）のガレ場は悪く、さらに足元がよく見えず転倒した。どうしようかと思っていたら小林さんが登ってきた。

小松君はすでに引き返したことを知った。

4) C2 に撤退

丁度、ノルエー・アメリカの混成パーテイが下山してきて、撤退をサポートしてくれた。C2 5800m まで横につき、足元がよく見えない私をガイドしてくれた。小林さんはザイルでむすび、後ろにずっとついてくれた。

テントに帰りつき、目薬をしてもらい、飲み物、食べ物をもらって一息ついたら少し見えるようになってきたが輪郭は見えず、一応通常に見えたのは翌日であった。

5) BC へ下山－メンドーサへ

12/31 日　C2 より迎えにきたレンジャー 2 名につきそわれて BC に下り、ドクターにみてもらうと、すぐにメンドーサ市内の病院に行くよう指示された。

1/1 日　佐々木、付添の小林は下山する事になり、C1 にいる若林を除く 4 人で BC の一部撤収を行う。目は充血気味であるが通常ベースに見えた。

佐々木はムーラ（ロバと馬のあいのこ）で 12 時過ぎに出発し、小林は徒歩にて夫々インカに向かった。

丁度 17：00 頃インカに到着、チャーター便にてメンドーサに 23 時過ぎに着き、旅は終わった。

6) 大きな反省と教訓

始めから、高度順化が問題であることは解っていたが、高度による顕著な影響があるものと思っていた。頭痛等の影響もほとんどなかったため、6000m までは問題ないと判断して、そのまま BC にはいり、結果的に 3 日目にアタックしてしまった。

このため高度順化不足が目にきたと思われる。やはり 6000m 前後での高度順化の手順は守るべきであった。今回の手順無視は、ここ 2－3 年海外にでかけ、高度順化に自信があったこと、及び、体調が良かったことによる。

目の方は、下に降りたことで何の支障もなく見えるようになった。思わぬ撤退により現役若林君および他のメンバーに迷惑をかけてしまい、恐縮している。

アコンカグアはやはり日本からは遠く、BC までの往復には 6 日間ほどかかり、また時差の慣れも必要で、簡単に行けるとまではいえない。

＜行動記録＞　小林 深さんの記録に基づきます。

19 日　成田発（先発隊　大阪空港経由）
20 日　ブエノスアイレス着－メンドーサ（20：00）
21 日　メンドーサーインカ（2700m）
22 日　コンフルエンシア着（3300m）
23 日　BC（4300m）入り
　　福山　高度障害かなりひどい　小松は軽度
24 日　福山　半ばもうろう、小松　頭痛
　　小林　4800m まで高度順化往復
25 日　小松、小林　C1（5200m）予定地まで往復
　　福山　回復せず
26 日　福山　BC のレインジャーの医師に診察、投薬受ける。休養日とする
27 日　小松、小林　C1 設営、泊る
　　福山　BC で休養
　　後発の佐々木、若林　BC 入り
28 日　小松、小林　6000m まで高度順化往復、C2 設営地の確保（5800m）、C1 泊り
　　若林　かなりの高度障害で BC 滞在
　　佐々木、福山　C1 入り
29 日　佐々木、小松、小林　C2 設営、入り。
　　小松、小林　6200m まで順化往復
　　佐々木　入山 2 日目で高度順応にヤヤ難の様子
　　福山　C2 より BC に下り、若林と休養
30 日　小松、小林組と佐々木単独との二手に別れてそれぞれアタック出発（7：20）
　　2 ピッチ目で小松体調不良で C1 へ。結果的に佐々木、小林がそれぞれ単独で登る事になってしまう。午後 1 時頃、頂上への稜線まであと 40-50m の急なガレ場の途中で佐々木に追いつく。様子が変なので聞くと目がみえなくなったという。これでは登頂どころではなく、すぐザイルで確保しながらガレ場を下降。その後、ドイツ、ノルウエー、アメリカの混成パーテイに助けてもらい C2 まで無事に降りることができた。
31 日　前夜、アメリカ隊が BC のレインジャーと無線で交信してくれてレスキユー隊がくることになる。

午後 1 時頃レスキュー隊が 2 人到着。佐々木を 2 人にまかせて、小林は荷物をもってBCへ直行。途中、若林がC2 に食料と燃料の荷揚げに上がってくるのに出会う。C2－BC 間が交信不能だったので事情を説明、荷揚げ後 C1 に入って指令を待つように指示。BC の医師は、即刻メンドーサの病院へ行けとの勧告。目に後遺症が残っては大変なので、佐々木を説得。下山の決心をする。福山、小松は BC。

1 日　佐々木はロバで、小林は徒歩でインカまで一気に降り、車でメンドーサへ。夜の 11 時半に HOTEL に着く。若林　C2 の撤収

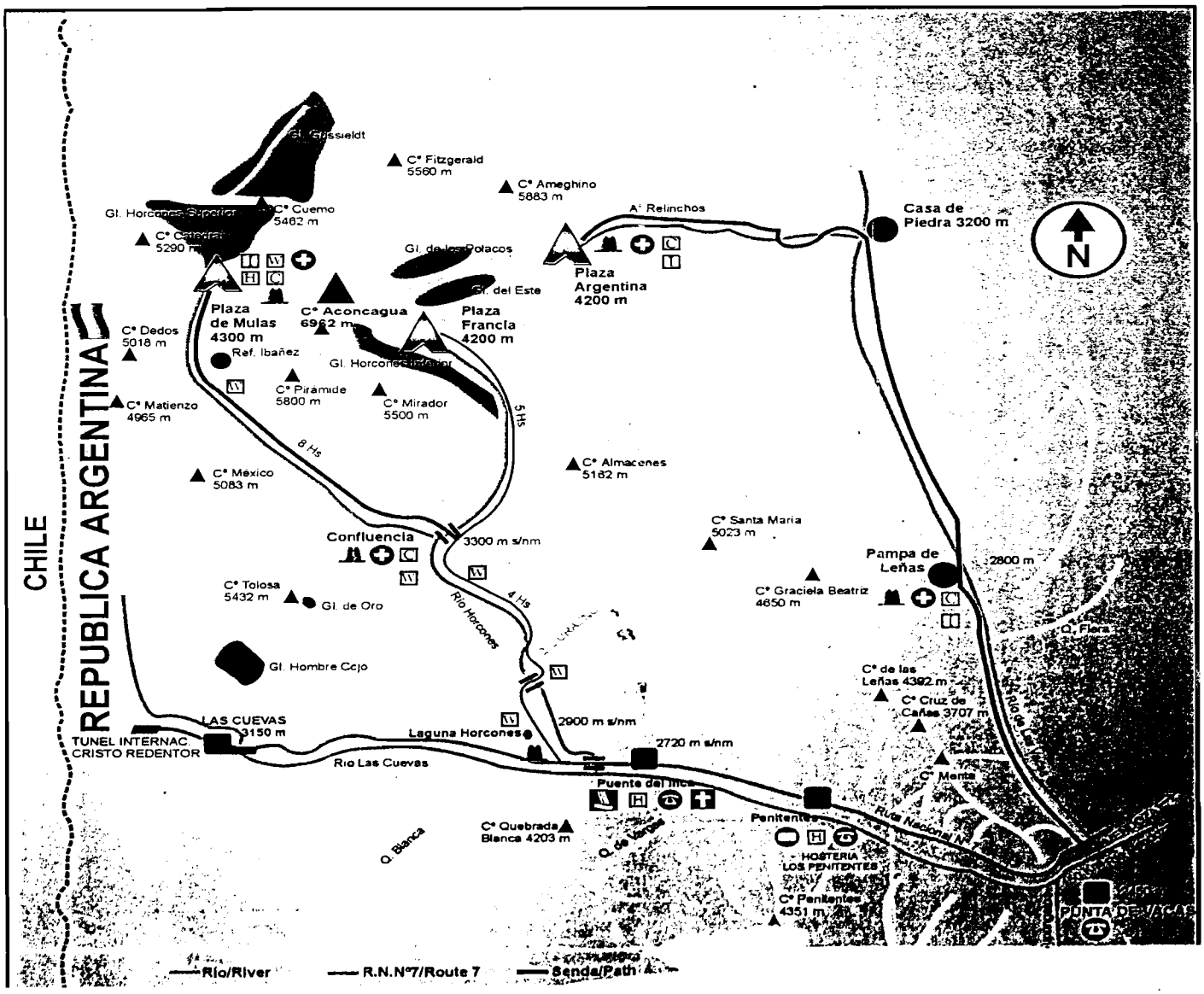
2 日　中央病院へ。日曜日だったが、幸い大変親切な先生が診てくれて、両眼とも紫外線で網膜が焼けているが、浅いので大丈夫だとの診断にホッとする。小松、若林　C1 の撤収

3 日　小松、若林、福山　BC 撤収し、コンフルエンシアへ

4 日　小松、若林　南壁トレック

5 日　小松、若林、福山　コンフルエンシアーインカーメンドーサ

6 日　全員ブエノスへ



“Nice to help you.”

小林　深

急な岩場を 2 ピッチ目、6200m地点で小松が体調不良で降りることになる。やむなく私も、単独で山頂を目指すことにする。

インデペンデント（6500m）まで来ると、急に視界が開けて、アンデスにはもうこれ以上高い山はない事が見渡せる。北側は主峰に遮られて見えないが、西側には氷河を抱いた山々が眼下に広がっている。南側は遥か彼方まで、延々と山々が連なっている。しかし、ヒマラヤやカラコルムのように、辺りを威圧する巨峰は無く、凄みも迫力も感じられない。遥かに連なる山々は、真っ青な空にくっきりした入道雲を戴き、見る目も鮮やかである。乾いた、明るい開放感が支配している。

ここから先は、余りきつい登りはなくどんどん登る。その内、頂上に通じる長くて急なガリー状のガレ場にやってきた。苦しい登りで、不用意にステップを取ると、登っただけづり落ちてしまう。づり落ちると踏ん張るため、体力を倍ほど消耗することになる。2～3 歩毎に、10 回くらい激しい息をせねばならない。上を見るとウンザリするので、ひたすら足元のみを見つめて、ゆっくりゆっくり焦らず着実に、あえぎながら高度を稼いで行く。どのくらい時間が経ったろう、と、見上げると頂上に続く稜線が直ぐそこ、あと 4～50mも無いところまで来ていた。頂上は稜線の直ぐ右横である。此処まで来れば、あとは楽勝だ。登頂成功間違いナシという事が分かると、それまでの張りつめていた気持ちから一気に解放される。6900m位の高さだが、幸い今日も高度障害は全くない。

ところが、ふと横を見ると、20m程左のガレ場の中に佐々木Ｌが立っているのを発見。声を掛けるが、どうも様子が変である。近寄って聴いてみると、何と目が見え難くなったと言う。私の顔も識別できない様だ。一人で降りれるかと聴くと、降りれると云うので、じゃあ降りろと云うと、忽ち 20m程滑り落ちたも同然の状態で降りてしまった。ルートはおろか、足元も良く見えていないようだ。転倒して、頭を岩にぶっつければ終わりである。それでも果敢に、ルートを外れて違う方向へ更に降りて行こうとする。

これはいかんと、直ちに登頂を断念、彼を追いかけて下降、ザイルを付けてガラ場を降りる。目が見えない為だろう、平衡感覚が取れなくてフラフラしている。ガラ場を過ぎて暫く行くと、やがて心配していた大雪渓のトラバース地点までやってきた。

万一、雪渓でスリップされると、私の力で大柄な彼を止めれる自信が持てない。大丈夫渡れるという彼を押し止めて、誰かが降りて来るのを待つことにする。

程なく現れたのが、大柄なドイツとノルウエーのパーティ。事情を話すと、我々が助けてあげようと云って即座に引き受けてくれた。2 人掛かりで佐々木の肩を両方から支え、急な雪渓を渡りきってくれた。私は後ろから、ザイルで確保する。あとは 1 人ずつ交代しながら肩を支えて歩き、急な岩場も 2 人で上手く下ろしてくれ、約 3 時間掛かって C2 に到着した。

私一人では、何もできず途方に暮れるだけだったので、彼らの真摯で懸命な救援にもう感謝感激であった。別れの時、名前と住所を書いて貰い、お礼の言葉を下手な英語で述べている内に・・ホントに心底嬉しかったので・・不覚にも涙が出てしまう。

それを見た一人が、私も彼に・・もう一人を指して・・かつて助けて貰ったんだと言って、私の肩を強く抱き、

“Ｎｉｃｅ　ｔｏ　ｈｅｌｐ　ｙｏｕ.”

・・・と云って、C1 へ降りて行った。素晴らしい言葉と共に、爽やかな、暖かい、大きな感動を残して・・・。それは間違いなく、物理的に山頂を踏んだよりも、遥かに大きな感動のように思われた。

長い 1 日の全てが終わった時、すっかり草臥れ果て、そのまま二人とも死んだように寝入ってしまう。夜半、猛烈な空腹感で目が覚め、ザックの中から行動食を手探りで取り出し、水もないまま寝袋の中でボリボリとかじる。混乱で、昼食も夕食も取っていなかったことを思い出す。

テントに入って指を見てびっくり。

小松　稔

「黒なっとるがな！」

さすがアコン南壁。

ドドーンとおちている。

記憶を頼りに走り書きしました。かなり客観性にかける報告ですがお許しください。

12月19日に日本を出発してからアルゼンチンまで、いやというほど長い空の旅。無事にメンドーサに到着ときは、嬉しかった。メンドーサでは食料等の補充と許可取得が主な仕事である。到着日は店などの場所確認と称して街を歩く。南米では常識かもしれないが、どの店でも長い昼休みを終えて少し仕事をすると店じまい、長い夕食タイムへと突入するのだ。5 時頃エージェントを訪れると「早く待ち合わせ場所に行きたいのに」と言わんばかりの対応である。街中 6 時頃から 10 時頃まで夏祭りの雰囲気だ。目抜き通りに並ぶレストランでは、分厚いステーキを前に皆楽しそうに語らいながら夕食の一時（長時間だろうが）を楽しんでいる。

21 日　許可取得と食料の買いだし、エージェントとの打合わせとつづき、登山口への移動のために車に乗る。2 時間以上走っただろうか。時差ぼけで皆車内では起きているのか、寝ているのか分からないような状況でいつのまにか「プエンテ・デル・インカ（インカの橋）」に到着。ホテルの裏側には少しぬるいが温泉もある。このインカの橋は話によると川の両岸から石灰岩が伸びてきてひっついて橋になったものらしく大変貴重な存在らしい。

22 日　車が出払っていてすぐに行けず、しばらく待たされての出発となる。ゲートで許可証を提示し、ゴミ袋をもらっていよいよトレッキング開始。正面にはアコンカグアが見えている。4 時間も歩くとコンフルエンシアに到着した。気持ちの良い場所で、殺伐とした谷の中でここだけはみずみずしさがあふれていた。夕方、200 mほど高度順化のため登ってみた。

23 日　昨日登ったところを越えると、いきなり平たんな、幅のやたら広い谷となる。歩けど歩けど、風景があまり変わらない。谷がやや右にカーブしだし、正面に雪のついた山が見えだす。それまで楽勝ムードであったが、そこからが遠かった。ふらふらになりながらようやくBC（プラザ・デ・ムーラス）に到着。

24日　比較的体調のいい小林さんはルートを偵察に、福山さんと私はキャンプ横のモレーンを、順化を兼ねて散歩した。

25 日　今日は、小林さんと私と二人 C1 まで行くこととする。BC 正面にみえる三角岩の後ろのキャンプカナダ（4800m）を経て 5200mのニード・デ・コンドル（コンドルの巣）を目指す。BC から見えるスカイラインの部分にキャンプ適地があり、テントが数張り（キャンプ・アラスカ？）あった。そこから雪田を進めば程なくコルに達する。ニード・デ・コンドルである。BC からの標高差と今の高度順化状態等から、C1 は先程のキャンプ地とすることとして下る。

少し疲れも感じたことから、26 日は休養日とする。動きの芳しくない福山さんが気にかかる。昨日もほとんどテントから出ていないようだ。昼から、気分転換に氷河の向こう岸にあるホテルへ出かけてみる。

27 日、今日は後発が入山してくる日である。C1 への荷をエージェントに託し、小林さんと二人で出発。快調に C1 に着くも、ポーターがなかなか上がって来ず、C1 を建てたのは薄暗くなりかけた頃だった。佐々木さんも BC に入ったようで、交信では、明日 C2 の荷をポーターが上げる。そして佐々木さん、福山さん、若林君の 3 人も C1 入りするという。「少し気が早いのでは」と思いつつも交信を終わる。

28 日　今日は C2 の場所設定と、できれば設営もと小林さんと二人で C1 を出る。ニード・デ・コンドルからトラバース気味に登っていくとしばらくで C2 のベルリン小屋に着く。標高が高くなってくると、ゆっくり息をしていると苦しくなってくる。能動的に「はっはっ」と呼吸を早くするとしばらくで楽になってくる。途中出会った日本人が相棒の女性にしきりに言っていた戦術で、これは使える。この日は手頃な場所に荷物をまとめてデポし、「明日設営しよか」と C1 に下る。

C1 には、佐々木さんと福山さんが登っていた。若林君はというと、高度障害と昨日の疲れか、動けないとい

う。そして何よりも C1 で僕らを迎えてくれたのはイリジューム（衛星携帯電話）であった。「山頂でこれ借りれるんやったら・・おれやったら 100 ドルでも出すで」・・その晩は、イリジュームによる商売の企画会議に花が咲いた。

翌 29 日、若林君を除く四人で C2 に入る。キャンプ設営後、小林さんと二人で高度順化に上がる。福山さんは、今日は一旦下りることとし、佐々木さんは、C2 で僕たちを待つことに。二人で急ぐことなく高度を稼ぐ。6200～6300m付近でしばらく過ごして C2 に戻る。翌日の出発時刻を決めて早めの就寝とする。

30 日　今日はできれば山頂までと気合いが入るが、体調が良くない。「まあ行けるとこまで行って戻ればええわ」と出発。しかし、少し進んだところで戻ることにする。小林さん佐々木さんと別れ、C2 に。テントに入って指を見てびっくり。「黒なっとるがな！」。コンロに火をつけ湯を沸かす。黒みはしばらくでなくなるが、気持ちはブルー。BC に下り、ドクターのもとに向かう。医師が何やら言うがスペイン語なので全くわからない。とにかくたいしたことはなさそうだ。

自分は降りてきたものの、佐々木・小林の両氏は山頂へ向かっているはずである。定時交信を行なうが、全くとれない。

翌 31 日も応答は依然なし。とにかく、状況を確認する意味も含めて、C2 に食料を上げることにする。体調の戻った若林に行ってもらうことにした。今日も結局分からずかと思った頃、小林さんかなといった風貌の人が下山してくる。手を振りだした。小林さんだった。

佐々木さんは目が見えず、レスキューに前後をフォローされながらゆっくり下ってきている。BCに到着した佐々木さんは意気消沈。ドクターからの至急下山の命令にかなり落ち込んでいる様子だ。診察結果が不安だが、元気そうなのでともあれほっとする。

佐々木さん一人では病院にも行けないので、翌日小林さんが付き添って下ることになった。残りのメンバーだが、アタックするかどうかの議論もあったが、レスキューに迷惑をかけている状況、隊長がいなくなったこと、福山さんの調子と私の凍傷という状況の中、C2 へ荷揚げをしてもらった若林には悪いが断念を決める。定時交信で C1 の若林に状況と決定を伝える。彼は素直に応じてくれたが、彼にとって本格的に登山が始まったところで中止の決定は辛かったに違いない。

1 月 1 日　とりあえず、そうと決まったら、C2 ・ C1 の撤収である。若林に C2 の撤収を頼み、私も C1 の撤収に上がる。

2 日　のんびり過ごすが、別にすることもなく、一日で飽きてしまった。明日からアコンカグア南壁のトレッキングでもしながら下ろうということになる。

3 日　余分な荷をムーラで運んでもらうよう手はずをつけて BC で預け、出発する。

のんびり休憩しながらコンフルエンシアに到着。コンフルエンシアではビールを飲みまくる。いままで禁酒してきのが一気に爆発。

4 日　ビールをリュックに忍ばせ、トレッキングに出かける。福山さんは体調がまだすぐれず、南壁が見えてきたところで引き返し、私と若林でそのまま氷河沿いに進む。さすがアコン南壁。ドドーンとおちている。二人で、自分やったらどうルートをとる？などと、飽きずに時を過ごした。写真家の小林さんが来られなかったのは残念だった。

1 月 5 日　今日はついに山とお別れする日である。のんびりと下山し、ゲートのチェックポイントで手続きをする。約束よりずっと遅れてやってきた車に乗り、インカへ。しかし車の手配が悪く、メンドーサに着いたときは、翌日に日付が変わりかけていた。それまで連絡がとれなかったので、佐々木さんも心配していたようだった。

深夜に到着したため、楽しみにしていた夜のメンドーサを味わえず、翌日には名残りおしいメンドーサともお別れ。日本からの距離を考えるともう 2 度と来ないだろうなと思いながら飛行機に乗った。

＜以降、お話しはまだまだ続きますが、どんどん山から遠ざかっていくので打ち切ることとします＞

今回のアコンカグアを振り返ってみて、決して山をなめていたわけではなかったのですが、一般的なルートであることなどから気持ちもゆるんでしまったことは否めません。余裕を持った日程にも関わらず無様な結果となってしまいました。

山岳会有志の皆さんには壮行会まで催していただきながら登ることが出来ず、本当に申し訳ございませんでした。この次がんばります！

山岳会総会が開催されました

平成 12 年 3 月 4 日〔土〕大阪弥生会館にて

あいにくの雨模様でしたが、36 名の参加をえて、盛況に行われました。
アコンカグアの報告以外にも、ニュージーランドやカラコルムの個人山行報告が続きました。
次第は以下の通りです。(詳細は省略させていただきます。)

- 11 年度活動報告 (企画運営/東京支部/現役など)
- 会員個人活動報告
- 会計報告・会計監査報告
- 12 年度活動計画
- ヒュッテ「雪線」運営委員会報告
- 講演　会員武部秀夫氏
  「1999 チョムカンリ登山隊報告

出席者：大橋、池永、廣谷、高木、服部、山本、橋本（信）、橋本（洋）、川勝、藤本、浅部、小林（深）、上堂、小笹、久保田、山辻、吉田、佐々木、上田、藤村、藤木、島川、奥田（寛）、大島、西村、兵頭、福山、武部、田中、八木、小倉、矢倉、小松、尾形、稲垣（賛助会員）、大堀（賛助会員）

平成 11 年度会計報告

1. 一般会計

＜収入＞		＜支出＞	
繰り越し	79,010	総会運営費	228,408
臨時会費	189,000	加盟費	80,000
年会費	389,000	行事費	10,000
		事務費	196,942
		宣伝費	10,000
		装備	35,790
		弔電	8,750
		通信費	10,070
		繰り越し	77,050
合計	￥657,010	合計	￥657,010

2. 特別会計（現役部員援助会計）

＜収入＞		＜支出＞	
繰り越し	174,449	講習会参加費	39,000
		講習会参加費	50,000
		保険など	18,200
		繰り越し	67,249
合計	￥174,449	合計	￥174,449

平成 12 年度　行事計画

企画運営幹事（藤村・上堂・上田・大島）

①3 月 18 日(土)～20 日(月)	西穂高岳西尾根 1999 年末山行再挑戦	(責任者：兵頭)
②3 月 25 日(土)	第 6 回バードウォッチング 早春の比良山に鳥の姿を	(責任者：上堂、島川)
③4 月 28 日(金)～5 月 7 日(日)	ヒュッテ「雪線」合宿 4/28～5/2　久しぶりの立山、剱岳の源治郎尾根を 5/3～5/7　中ア木曽駒ヶ岳雪壁・岩稜登攀	(責任者：上田、兵頭)
④5 月 28 日(日)	第 109 回大阪市立大学ボート祭 悲願の二回戦三回戦進出を！	(責任者：八木)
⑤6 月上旬	ヒュッテ「雪線」感謝の集い 山荘建設にお世話になった方々にお礼の集いを	(責任者：藤本)
⑥6 月中旬	近山会合同山行（山荘利用） 南ア　千丈・甲斐駒	(責任者：八木)

⑦7 月中旬～8 月中旬	ヨーロッパアルプス合宿 シャモニ、ツエルマット、グリンデルワルトを BC に！　散策も可能。	（責任者：佐々木、小笹）
⑧9 月中旬	北アルプス・南アルプスの旅 皆様のご要望をお寄せください。	（責任者：福山）
⑨10 月 7 日(土)～9 日(月)	紅葉と新雪の北アルプス 秋山入門　新穂高～西穂高～上高地	（山荘利用）（責任者：兵頭）
⑩11 月中旬	ヒュッテ「雪線」三周年記念イベント	（責任者：久保田、上田）
⑪12 月後半～1 月初	スキー及び冬山登山（山荘利用） 八ヶ岳、八方より唐松岳	（責任者：上田・兵頭）

※　行事の事前個別案内は、経費節減のため一切やっておらず、年間行事の案内は総会だけですので、
参加希望者は行事責任者へ連絡していただきますようお願いします。

総会欠席のはがきより

山田裕敏

3 月の西穂西尾根完遂に向け、Training 中です。

澤井弘忠

100 名山をやっており、今年は 8 山 60 名山まで伸ばしたいと思っています。昨夏はポロシリ、今夏はトムラウシに計画中です。

中嶋信正

昨秋のヒュッテ「雪線」2 周年行事では大変お世話になりありがとうございました。山さんと登った木曽駒の雪の装いが快晴の陽光に輝く姿は久しぶりに山を実感しました。

住吉仙也

本日（2/14）カナダ、イエローナイフ、バンフより帰国しました。スバラシイ“オーロラ”を見ましたが、photo は撮れないものでした。

＜会員消息＞

昭和 12 学部卒　西濱覺三氏　平成 11 年 12 月 19 日　ご逝去されました。ご冥福をお祈りいたします。

＜住所変更など＞

内藤　毅	国内連絡先の郵便番号が変わりました。212-0054
馬野庄二	3 月に酒類卸売業を廃業します。
中井　博	勤務先　福井工業大学工学部　tel 0776-22-8111　fax 0776-29-7890
吉住昭夫	定年退職しました。
吉田　均	定年退職しました。
龍田紘男	退職しました。
大島一恭	自　宅　563-0103　豊能郡豊能町東ときわ台 8-1-2　tel 0727-33-2548
	勤務先　㈱日立製作所　情報システム営業企画センター　tel 06-6616-1375　fax 6616-1082
武部秀夫	勤務先　操山公園里山センター　tel/fax 086-270-3308（みさおやま）

＜住所訂正＞

渡辺教行	郵便番号が違います。　471-0814
尾形達也･睦	前号でも訂正しましたが、郵便番号と部屋番号がちがいます。 554-0012　大阪市此花区西九条 5-3-30-604

＊＊＊＊＊ 1999/2000 冬山 ＊＊＊＊＊

白馬北方稜線

尾形達也

正月山行は２年続けての単独行となった。

今年は前年敗退した白馬岳北方稜線のリターンマッチである。長栂山以北は昨年トレースしているので、今回は長栂山から黒負山を経て姫川中流部に至る尾根から取付くことにした。この尾根は末端まで約 20km の距離があり、日本海までのびている主稜線とほぼ同じスケールを持つ。全体的になだらかな地形で、スキーツアーに向いているかもしれない。

また岩稜もルートに加えたかったので唐松までの縦走を追加した。下山ルートはひっそりとした谷底の方が似つかわしいように思い、餓鬼尾根から櫛平にとった。

途中に北アルプスのメインストリートを挟んでいるものの、人目を避けて登りに来たようなルートになってしまった。

12 月 23 日　雪→晴

平岩駅（7：20）―赤禿山手前 910m（15：50）

平岩駅に到着時には大雪が降っていた。最奥の集落山之坊までタクシーで入るつもりであったが雪を理由に断られ、徒歩で出発。山之坊まで約 1 時間半。到着するころには雪も止み青空が広がっていた。ここから太股程度のラッセルとなる。雪が重くはかどらない。空身でトレースをつけ、ザックを回収に往復を繰り返し前進する。

24 日　晴

サイト（6：50）―赤禿山（9：35）―尾根上 1280m（15：20）

ラッセルは多少ましになった、膝前後というところか。今日は荷物を担いでラッセルをする。10 時頃富山県警のヘリが飛来し、しばらく廻りを旋回して西の方へ帰っていった。「世話にはならないぞ」とは思うものの、心強く思う自分の弱さが少しくやしい。

1280m小滝川側への支尾根とのジャンクション辺りで泊る。

25 日　雪

サイト（7：10）―1727m ピーク（15：15）

日本海を進む低気圧の影響で朝から降雪、視界は数百メートル。ラッセルは昨日と同じく膝前後であるが、今日はなんだか調子がいい。快調に飛ばす。

昼を過ぎたくらいから今日降った分の新雪が深くなりペースダウン。この日は 1727m ピークまで。

26 日　吹雪

サイト（7：10）―1800m 地点（11：00）

今日は弱い冬型気圧配置とのこと。朝起きるとテントは半ば埋もれており、激しく雪が降っていた。とりあえず出発するが猛烈なラッセルに苦しむ。当然空身になるが、時には五体投地を繰り返しの前進となる。4 時間で 800m しか進めない。明日は確実に天気が回復することもあり早々に行動を打ち切る。

27 日　快晴

サイト（7：30）―黒負山（11：00）―五輪山北のコル 2000m（15：50）

今朝のテントも埋没寸前、撤収に手間取る。天気は回復したがやはりラッセルは猛烈。

2000m を越えた辺りからクラストしておりペースが上がるが、黒負山を過ぎると今まで以上に深いラッセル。五輪山北側のコルまでとする。

計画では３日目には国境稜線に到達の予定であったが、5 日目の今日もまだ届かない。晴天も確実だし明日は早目に出発しよう。

28 日　快晴

サイト（6：40）―朝日岳（11：00）―赤男山（15：10）―鞍部（16：00）

西よりの風が強い。五輪山の登りは気持ちよくクラストしており、ここからアイゼンワッパとする。

長栂山周辺の雪原は雪が深く、間近に見える朝日岳がなかなか近づかない。朝日の頂上では久しぶりに人工物を目にした。

次のピークの赤男山はほぼ稜線通しに越えたが、尾根の西側を水平に巻いていく夏道の方が恐らく正解だったろう。赤男山を下った鞍部、稜線から西に 200m、木がまとまっているところに設営する。今日は疲れた。

29 日　雪

サイト（8：00）―コル（9：00）

降雪は少ないがホワイトアウト状態。

ここから雪倉岳の登りの稜線は岩壁に遮られているので、稜線東側の斜面をトラバースして支尾根を登ることにしたが、雪庇を越えて斜面に出る所がさっぱりわからない。コルでしばらく視界の回復を待つことにし、小さな雪洞を掘り中で待機する。

視界は回復せず結局この雪洞の横にテントサイトを作ることになった。

30 日　曇り→晴

サイト(7：40)―雪倉岳(10：00)―雪倉避難小屋（10：50～11：20）―三国境(13：10)―白馬岳(14：10)―白馬小屋（14：30）

今日はガスが時々切れ、視界が多少ある。雪倉岳の頂上付近では晴れていたが避難小屋に着くころにはホワイトアウト状態。立派な避難小屋と外の状況を考え合わせると沈殿したい気持ちになってくる。しばらく迷った末出発するが、鉢が岳の登りにかかった辺りからガスが切れてきた、そして頂上に着くころには完全な快晴となり思わず頬が緩む。

白馬岳はまだ遠くに見えたが、クラストした稜線にペースも上がりみるみる近づく。振り返ると避難小屋のコル周辺だけが相変わらずガスがかかっている。もう少しで騙される所だった。

三国境からは今回初めて他人のトレースを見た。白馬岳の頂上には 1 時間後に到着。目的はピークという、点ではなく、ルートという線なので頂上についても眺めがいい以外にあまり感想はない。

白馬を越え小屋の横にテントを張った。

31 日　快晴→曇り→雪
サイト(6：40) ―天狗山荘(9：10～30) ―不帰のコル(12：00) ―唐松岳 (15：00) ―餓鬼尾根 1920m(17：10)

今日もクラストした雪稜を快調に進む。
不帰の岩稜はけっこう迫力があった。夏道通しに行けるところは問題ないが、雪庇に遮られて夏道と別ルートになる部分が少々やっかいだ。最初の悪場では先行パーティーのロープを使わせてもらい、後はトレース通りに岩場を登るとII峰の頂上を越えた辺りで夏道に合流した。先行パーティーがいなければ、もう 2 時間くらいかかったかもしれない。

唐松の頂上に着くころには黒部側からガスが沸いてきた。八方尾根を下れば数時間後にはビールにありつける。ほんの少し（多分 10 秒くらい）逡巡したが予定通り餓鬼尾根に向かう。餓鬼尾根には今日登ってきたものと思われるトレースがあった。トレースは使えるうちに使うべく、この日は暗くなるまで行動した。

1 月 1 日　雪→曇り
サイト(8：15) ―餓鬼山(11：00) ―祖母谷(16：25) ―祖母谷トンネル出口 (16：40)

昨夜からの降雪でトレースはかなり埋まった。この日も消えかけたトレースを辿り尾根を下るが餓鬼の田圃を過ぎた辺りでトレースが判然としなくなる。尾根から適当に斜面を下り南越から祖母谷温泉へ至ったが、沢沿いはデブリや斜面のトラバース、滝を巻き降りる所などが危なっかしい。雪質にもよるが尾根通しの方がいいかもしれない。

1 月 2 日　晴
サイト(6：40)―欅平(8：00) ―宇奈月温泉(13：30)

欅平への車道は、デブリをトラバースする箇所が所々にある。雪も硬く川まで急傾斜の斜面が続いており緊張する。最初のトラバースでワカンとストックをアイゼンとピッケルに取替える。

欅平からはトンネルをとぼとぼ歩く。

山行自体は計画通り完璧な成功であったが、期待していたほどの歓びを味わうことは出来なかった。最後の関電トンネルなど、湧き上がる感動と山の余韻に浸りつつ歩くことを想像していたのだが、これといった感慨はなかった。確かに前半は深雪に苦しい思いをしたが、必死になるほどの場面もあまりなく、悲壮感とも無縁、先を思いやって重苦しい気分に沈むこともなかった。計画自体は自分としてはかなりきついものにしたつもりであったので、当てがはずれたような気持ちである。

天気が悪ければ悪いで「こんなとこおったら死ぬで。」とか言いつつ自らを納得させる理由を適当に考え、さっさと敗退するのだから、好天に苦情を言うのは身勝手なことである。

厳しさを求めて冬山へ行く一方で、晴れればうれしいし、他人のトレースを見つければありがたく利用させてもらっているのだ。満足出来る山行というのはなかなか難しい。

西穂高西尾根

メンバー：藤本、小笹、伴、苑樹、山田、兵頭
新雪の腰までのラッセルで西穂アタック中止となった。

12 月 23 日　晴れ
駒ヶ根「ヒュッテ雪線」(6：35) ―新穂高駐車場 (9：00－9：45) ―穂高平避難小屋 (11：20－11：50) ―テント場 (2：50)

12 月 24 日　快晴無風
テント場 (7：15) ―西尾根 2,050m テント場 (1：30)

12 月 25 日　小雪
テント (8：15) ―初日のテント場 (9：25－9：45) ―穂高平避難小屋 (10：35－10：50) ―新穂高駐車場 (11：45) ―駒ヶ根「ヒュッテ雪線」

2000年初日の出　礼拝登山

上田忠士

2000年のご来光を見るため木曽駒ヶ岳へ登った。
メンバー：上田、八木、佐々木（八木の同僚、28才男性）

12月30日：大阪千里中央に集合。駒ヶ根「雪線」に到着16：30。我々3人のみ泊まり。

12月31日：快晴。桂小場へ向かう。信大管理棟前の駐車場へ駐車。
桂小場 7：45－ぶどうの泉 8：10－野田場 9：35－馬返し 10:05－大樽小屋(10:55-11:35) －分水嶺 14：20－将棊の頭 15：15－西駒山荘 15：30

1月1日：快晴、風あり
7時3分南アルプスの向こうに富士山が見え、その左より初日が昇る。大きなひとつの目標が達せられた。雲ひとつない快晴。風はややあり。
山荘出発 7：15－駒ヶ岳（10：25～11：05）－山荘着 14：00

1月2日：快晴
西駒山荘 7：45－分水嶺 8：35－大樽小屋（9：50-10：10）－馬返し 10：40－野田場 11：00－桂小場 12：10
行動日3日間とも快晴に恵まれ楽しい登山であった。このコースは西駒山荘を利用すれば、行動に無理がなく、お勧めである。但しラッセルがあれば初日に西駒山荘に到着は困難である。山荘横のトイレは使用できた。

1月3日　小雨
雪線出発 9：40－千里中央到着 13：20

御岳（王滝頂上）スキー滑降

上田忠士

メンバー：兵頭、上田、大島、吉村（兵頭の友人）
日時：2000年2月11～13日

2月10日（木）
京都四条大宮に4人 9：30 集合。兵頭車で「雪線」へ。到着午前 12：40。就寝 3：00　雪少ない。

2月11日（金）ガス
大島君が早起きして朝食、おにぎりを作ってくれ、兵頭、上田、吉村は 8 時に出発。大島は小屋番。翌日の池ノ平山散策にそなえる。中津川経由国道 19 号を北上、御岳スキー場へ。ゴンドラでスキー場上部へ上り、ここからシールをつけて田の原へ。何とここまでは初心者向けゲレンデがあり、滑って来られたのに。ここには4、5のテントが張られていた。
夏道通り約1時間登り、大江権現の向かいに幕営。14：30着。ビーフシチューと日本酒の夕食。就寝 19：20。高度 2300m の冬山としては寒くない。

2月12日（土）快晴　やや風あり
起床 5：00　出発 7：20　兵頭、上田はスキーにシール、吉村はワカンで登高。ほぼ夏道通りすすむ。ラッセル 10cm 程度。金剛童子よりスキーを背負い、アイゼン登高。アイスバーン状になっており、ここからシール登高は不可。夏道のある尾根を登り、王滝頂上 2936m10：40。ここにスキーをデポし、御岳剣ヶ峰（3047m）へ。到着 11：20。　360°の展望を 12 時まで楽しむ。
王滝頂上まで下り、ここからスキー滑降。登ってきた尾根を左に見て大斜面をコースにとる。下の樹林帯まで見渡せる。最初のターン 2 回はアイスバーン、エッジにしっかり乗る。その先は広いルンゼ状の沢筋になっており、バージンスノーが続く。2 人はシュプールを描き、滑降する。兵頭君は我々のビデオ撮影に徹す。次第に雪が深く緩斜面になり、樹林をぬってテントサイトへ。到着 14：20。テントを撤収し、スキーで田の原へ。下りは早い。田の原からゲレンデを滑り駐車場へ。王滝温泉につかり、塩尻経由「雪線」へ。到着 22：00。再び4人になって痛飲す。

2月13日（日）
「雪線」発 9：10-京都着 12：00　全く渋滞なし。

※御岳（王滝頂上）よりのスキー滑降は高度差 600m、斜度 15～25°くらい。直線距離 2400m。上部はアイスバーン、下部は雪の状態によっては雪崩もあるだろう。今回の我々の滑降は非常に条件がよく、快適であった。
吉村さん：女性、スキー2級

※山スキーを愛するメンバーをさがしております。私も決してスキーは上手ではありませんが、ゲレンデより舞台が広く楽しいです。

随　想

Because it is there.

小林　深

マロリーの遺体発見される・・・というメールを藤本先輩から頂いたのは昨年の 6 月頃でした。マロリーといえば、一般にはエベレストを目指した登山家としてよりも、"Because it is there."という名言を吐いて一躍有名になった人である。

我々は何によらず自分の行為に理屈をつけたがる癖を持っている。「そこに山があるからだ」の逸話は、その象徴として有名になってしまった。理由づけをし、意義を見つけだし、納得しないと力が入らない。たとえば企業であっても、ものを生産する意義をみつけだし、納得して、そこから理念や基本方針を作り上げないと逆境に負けない強い体質が作れない。もっと極端な例では、生きる意義が見い出せずに命を絶ってしまう人まで出てくる。また、私のように道楽で写真を撮っていても、写真は芸術か、山岳写真と風景写真とは何が違うのか・・といったことを次々と考え、自分なりに納得しないことにはどこか落ちつけない。

このように、人が自分の行為に理由づけしたがるのは、人間なるが故の本能である。実は、そこには人間の脳にのみ存在する脳神経学的理由がある。

もともと生物の脳は、生きてゆくための行動の評価判断器官として進化発達してきた。食べられるか食べられないか、逃げるか戦うか、といった生命維持のための判断器官であった。その能力の劣る個体は、淘汰されてしまった。脳は、本質的に評価判断器官なのである。

ところで、よく知られているように、人間の大脳は左右二つに分かれ、左脳の中心には言葉をあつかう言語中枢がある。これは、およそ 250 万年前に系統発生的進化として現れ、以後進化を重ねるたびにこの部分が発達して、今日のように自在に言葉をあやつれるようになった。もともとあった動物としての直感的認識や判断能力は、その結果右脳にのみ残ってしまい、単純にいうと、左脳は言葉をあやつる言語脳、右脳は言葉を介さず直感的に判断する直感脳ということになってしまった。

左脳のあつかう言葉は、単語を無秩序に並べても作れない。本質的に論理構成が必要である。その結果、言葉の発達とともに左脳は論理的能力を高度に発達させることになった。評価器官としての左脳は、言葉を用いて論理的に評価し、判断を下すようになっていったのである。それが、左脳の役割となった。

さらに、我々の自意識は、言語を介して作られていることが知られている。つまり、我々は自分自身を言語世界に写像して、自意識化しているのである。つまり、言葉により自意識を持ち、常に自分の行動を客観視し、評価するようになってしまったのである。この結果、納得できる評価が得られない行為に対して、疑問や抵抗を感じるようになってしまった。

ところが我々は、時として何故か、そうした理性で十分に説明できない行為に夢中になってしまう。危険をともなう登山などは、その典型である。つまり、自らの生存に関係ない行為、時にはそれを危険にさらす行為にすら夢中になってしまう。

その多くは、暗黙知の次元（自覚できない意識）から創発された行為として説明されている。そこから出てくる、感情、意欲、意志、欲望・・・その結果としての行為は、もともと理屈（理性）から出てきたものではないのである。しかし、その行為に対しても左脳はむりやり理屈をつけたがり、説明と評価を要求してしまうのである。その結果、我々の理性は、それを十分に説明しえないところに追い込まれてしまう。

古代ギリシャ時代以来、哲学者達を悩ませ続けてきた「人間が生きる目的や価値」も同じである。もともと目的や価値が存在して、人類は生まれてきたワケではない。であるが、人間が生存している限り、左脳はその理由を要求してしまう。なかったモノを要求するのである。だから、哲学者達は苦心惨憺してそれを作り出さねばならないハメになっている。

このように、言葉を持ってしまった人間は、全てを言葉で（理性で）、評価し判断しなければ安心できないという、責め苦を背負って生きなければならないことになってしまったのである。それがアダムとイブの犯した、罪と罰であろう。

しかし、好きで、面白くて、のめり込んで、燃え上がって、陶酔している人・・心身一如・心芸一如の世界に居る人・・に理屈は要らないだろう。マロリーに理屈は要らなかったのである。"Because it is there."で十分であったのだろう。

もし、言葉を忘れることが出来れば、誰しも「心身一如」の世界にたやすく入れてしまうだろう。残念ながら我々の脳構造は、さきに述べたように心身二元的に構成されている。言語脳を、むりやり押さえこんでしまわない限り、「心身一如」は難しい。要するに、左脳の要求にしたがって理屈で考えている限り、「山がそこにあるからだ」という至高の境地には到達できないということである。

ということは、あんまりヤヤこしく考えないで、素直に山を楽しんでるのが一番エエということになるのである。

閑古人

カナディアンロッキーの旅　1999.9　宮崎多一郎

リフレッシュ休暇（勤続 25 年）を利用して、9 月 20 日から家内と 2 人でカナディアンロッキーの旅にでた。カナディアンロッキーは、北米ロッキー山脈 4500 キロのうちカナダ領約 2000 キロをいう。北からコロンビア大氷原のあるジャスパー国立公園、バンフ国立公園、ヨーホー国立公園、クートネイ国立公園などの国立公園に指定され、環境保護が図られている。最高峰の Mt.ロブソンの 3945m を筆頭に 3000m 以上の山々が 500 以上も連なるという山の広さ・深さ、多くの氷河と数多くの美しい湖沼群に特徴がある。山容は氷河に削り取られたためか谷に向かって断崖絶壁となっており容易に人を寄せつけない厳しさである。日本アルプスの剱・槍穂高・宝剣などを組み合わせたようだ。また、日本アルプスのように尾根伝いに登山道があるわけでなく氷河に覆われた頂上への途は完全はアルパインルート。一方でハイカーのためのトレッキングコースは谷の反対側に開発されており、比較的なだらかな高原散策が楽しめるようになっている。

今回はバンフの南のキャンモアに宿泊し、1 日目はバンフ国立公園、ヨーホー国立公園を中心とした観光で、氷河に削られてできたマーブル渓谷（幅数メートル、深さ 10 メートルの奇抜な谷）、氷河をいただいた Mt.ビクトリアが湖面に映えるレークルイーズ、テンピークス（10 の山峰）に抱えられたモレーン湖、そしておだやかなエメラルド湖などを訪ね、ロッキーの自然を堪能することができた。2 日目は藤森さんという 30 歳くらいのガイドに案内してもらい、標高差 500m10 キロ足らずのコースを 5 時間位かけてハイキング（レークルイーズを見下ろす 2270m の Big Beehive 登山）を楽しんだ。このコースはシャトルレークルイーズからミラー湖まで登り、さらにアグネス湖まで歩く。そこからつづら折れの急坂を登り切ると、Mt.BigBeehive。そこからは、コバルトブルーのすばらしいレークルイーズを眺望できた。下りは、来た道と反対側を Mt.ビクトリアを眺めながら、レークルイーズ側に降りていく。途中、藤森さんから、植物の話、インディアンの話、よく出没するというクマやエルクの話などを聞き、時のたつのを忘れるほどであった。

今回は 9 月後半にもかかわらず、快晴気温 20℃という天気に恵まれ、空と湖と森林と氷河のコントラストがすばらしく、写真も腕前以上に上手に撮ることができた。（朝晩は 10℃以下まで冷え込み、セーターが必要であったが。）

カナディアンロッキーの後、カルガリーからバンクーバーへ飛行機で移動。雨のバンクーバー市内を観光し、5 泊 7 日の旅行を終え、無事帰国した。
（旅程：9 月 20 日成田発。20－22 日キャンモア泊、23－24 日バンクーバー泊、26 日帰国）

編集後記

先日の総会で、なんと 30 才台が 3 人。それも後半。それで最年少。なんだかさびしくなりました。

最近の原稿できになること、らぬき言葉です。食べれると食べられる。来れる、来られる。日常の口語では平気で使っているのですが、文章だとちょっと気になります。ニュースの原稿でも増えてきたように思います。
言葉はいつの時代でも変化するもの、という認識は十分あるのですが、まだちょっと、受け入れるには、あと少し。という感じです。でももう寸前かな。　【む】

市大山岳会ニュース
大阪市立大学山岳会発行
会長：池永薫爾
編集：矢倉　睦